

上智大学

教授 堀坂 浩太郎



会議所が結ぶ2つの時代：クビシェッキ政権とルーラ政権

商工会議所の会員でないにもかかわらず、創設50周年の記念誌に書かせていただく光栄に浴しましたのは、今となれば、その当時のリオ・デ・ジャネイロを知る数少ない日本人のひとりとなったことによるものと思われます。商工会議所の発足から3ヵ月経った1955年12月に父が当時まだリオにあった日本国大使館に経済担当官として赴任し、それからさらに3ヵ月後の56年2月、11歳であった私は家族とともに船いっぱいに移民の方々を乗せたアメリカ丸でリオに到着しました。戦後のまだ世相が暗かった日本から40数日をかけて着いたリオの美しかったこと、それに出迎えてくれた父の麻の背広の白さがまばゆかったことを思い出します。

この年の1月31日にクビシェッキ大統領が就任し、「50年を5年で」のスローガンのもとにブラジルが国家建設を躍進させた時代の始まりでした。前年の8月には、戦前、戦後と2度にわたって18年余の間政権を担ったジェツリオ・ヴァルガス大統領が外資弾劾の檄文を残して非業の自殺を遂げていましたが、政争の陰は感じられませんでした。むしろ、1957年発刊の『ブラジル経済年鑑』（ブラジル日本商業会議所編）の序文で、「本邦の企業が最も活発に進出して来つつあるこの国は、わが国にとって多くの友好諸国の中でも特に重要な位置を占めるものの一つである」と当時の安東義良大使が述べておられるように、活気あふれる日伯関係の幕開けでした。

大手商社といえども駐在員はまだ一人二人の小さな世帯ではなかったかと記憶していますが、トヨタ自動車をはじめとする企業進出やインブラス、ウジミナスの大型プロジェクトの交渉開始、鉄鉱石の対日輸出や船舶の商談など、首都であると同時に当時はまだブラジル第一の都市であったリオ・デ・ジャネイロの日系ビジネス界は意気に燃えていたことを、子供心にも感じたものです。日本食といえば、ニテロイへの船着場、プラサ・キンゼにコロニア産の食材を並べた食堂があった程度でした。直行便のない時代、何日もかけ飛行機を乗り継いで来伯される視察団の方に、せめて家庭料理の日本食をということで奮闘する母に連れられ、メルカードに新鮮な魚の買出しに出向いたことが懐かしく思い出されます。官民挙げてのビジネス戦士の時代でした。

1950年代から70年代にかけてのリオを舞台に繰り広げられた日伯交渉史は、商工会議所の会計理事を

長年つとめられた亀井紹雄さん(元日綿社員)が、リオ日系協会の会報『リオ日系』に「激動の時代を生きて」と題して長期連載の記事を残しておられます。その後1997年に、パウロ・ヨコタ、二宮正人両氏の編纂で、『戦後の日伯経済関係』(Kaleidos - Primus社)がサンパウロで出版されました。この中に、父から聞いた当時の様子を「日伯経済関係の夜明けー1950年代後半におけるエコノミック・アタッシュの見聞を通じて」と題してまとめていますので、ご覧いただければと思います。

1960年4月に、クビシェッキ大統領の手によって公約どおり新首都ブラジリアが竣工し内陸開発の幕が切って落とされました。フォルクスワーゲンの“カブト虫”が国産乗用車第一号として街を疾駆し始め、製鉄や造船など「輸入代替工業化」が本格化した時代でした。外交面でも、クビシェッキ大統領が提唱した経済・社会開発のオペラソン・パナメリカーナ(汎米作戦)がケネディ米大統領による「進歩のための同盟」へと結実していきます。

その後ブラジルは、政治面では1961年～63年のポプリズモ(人民主義)的な文民政権による混乱期、1964年から1985年までの長期軍政期を経て民主政権となり、一方、経済面では、1968年から1973年にかけて「ブラジルの奇跡」と呼ばれる高度成長を謳歌したものの、外資依存の開発主義の結果、対外債務の返済不能に陥り「失われた10年」の辛苦を味わうこととなります。1994年のレアル計画によって漸く安定成長へのきっかけを掴んだところです。この間、商工会議所はメンバーの顔ぶれこそ変わったものの、ブラジルの紆余曲折に参与され、その証言者となってこられたといえましょう。

こうして今、創設50周年を迎えられたわけですが、それはまた1955年の発足の時がそうであったように、これからの50年のスタートラインでもあります。しかも2003年に発足した現ルーラ政権は、しばしばクビシェック政権時代と比較されます。グローバリゼーションや地域主義といった点では、ブラジルを取り巻く環境は大きく変わっていますが、文民大統領のもと自由闊達な政治的雰囲気と成長政策へのカジ取り、多民族国家らしい世界全体に目を向けた幅広い提案による国際的認知獲得への国民の期待は、50年前の創設期に発起人の方々が感じたことではなかったでしょうか。

50年の節目が過去の足跡を祝うものにとどまらず、時代の先行きを読み解く機会になりますことを念じます。だいです。